

教科におけるリテラシーの指導方法に関する実践的研究

－社会科を中心として－

STUDY ON TEACHING METHODS OF LITERACY IN SUBJECT AREA

－WITH A FOCUS ON SOCIAL STUDIES－

名部 伸好

Nobuyoshi NABE

第1部 研究の目的および内容と方法

1 研究の目的

平成20年3月28日に改訂された小学校学習指導要領では「言語活動の充実」がうたわれている。小学校学習指導要領解説－総則編には、「各教科等の指導に当たっては」、「言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語活動の充実が必要であることを示した」と書かれているこのように、各教科等の指導において言語に関する能力の育成を求めている。

教科における言語能力は、聞いたり話したりという話しことばの能力と同時に、読んだり書いたりする能力が含まれる。本研究で、教科における読み書きの能力を教科におけるリテラシーととらえ、その指導方法を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究の概要

(1) 教科におけるリテラシー指導の先行研究

教科におけるリテラシーの指導の研究に関するものは次のようなものがある。

中野和光(2004)は教科におけるリテラシーの指導に関するわが国で最初の提案を行っている。その中で、小学校の社会科における作文指導の実践事例が報告されている。この実践事例は、出会うー見通すーふくらめるーまとめる、という学習過程の各段階で書くことを位置づけたものである。

井上一郎(2006)は、読解力指導の授業実践事例をPISA型読解力の向上をめざした立場で紹介している。また、テキストに基づいて自分の考えを書く実践事例も報告している。

有元秀文(2008)は、テキストから読みとる実践事例を報告している。

高木展郎(2008)は各教科等における言語活動の方策と実践事例を紹介している。「社会」の実践事例は、「学習問題を追究し、調べ、考え表現する」社会科授業を展開すると、自ずと言語力の育成につながるという考えで、実践を行っている。

水戸部修治(2011)は、新教育課程モデル事例集として、社会科については「話し合いを通して考えを深める」という実践事例を報告している。

(2) 米国におけるリテラシー指導の先行研究

米国では、教科におけるリテラシーの指導に関する書物が多数存在する。数学、理科、社会科について主要なものをあげると次の通りである。

算数、数学では、ケニーJohn M. Kenney(2005)は、「数学は言語である」とし、「言語は名詞と動詞をもつが、数学も名詞と動詞からなっている。名詞とは、数、測量、形、空間、関数、型、データ、順序である。動詞とは、モデル化と公式化、変形と操作、推理、伝達という4つの行為である。」同氏は、このような考え方をもとにして、数学におけるリテラシー指導のストラテジー、教室のディスコースの指導について説明している。

理科では、ソールE. Wendy Saulら(2004)が、教科の「越境」によるリテラシーの指導を紹介している。その書物は、理科の授業において教科を横断した国語リテラシーの指導を行うという構想で編集された論文集である。ウェリントン Jerry Wellingtonら(2001)は、「1.すべての科学の授業は、言語の授業である。2.科学を学習するほとんどの生徒にとって、言語は主要な障壁である。3.これらの障壁を克服できる実践的なストラテジーがある。」という出発点で理科における言語活動のストラテジーを説明している。

社会科では、メルバーら Lean M. Melber & Alyce Hunter(2010)が、国語と社会を統合した指導を紹介し、総合学習の形で実践を報告している。また、オグレ Donna Ogleら(2007)は、社会科の教科書を読むことの指導を中心として、社会科におけるリテラシーの指導のストラテジーを説明している。立場的には、ウェリントンらに近く、教科固有のリテラシーがあるという考えで具体的な教授ストラテジーを紹介している。

これらを大別すると、次の3つの立場に分けることができる。

1 越境型

国語以外の教科において国語の指導をおこなうという立場である。

2 総合学習型

国語と他の教科との総合学習として、言語の指導を行うおうとする立場である。

3 教科の固有の言語の指導型

各教科の指導が、それ自体、言語の指導であるとする立場である。

本研究は、これら 3 つの立場の中で 3 の立場に立ち、社会科におけるリテラシーの指導方法を研究した。その出発点を次のように考えた。

- 1 すべての社会科の授業は、言語の授業である。
- 2 社会科を学習するほとんどの生徒にとって、言語は主要な障壁である。
- 3 これらの障壁を克服できる実践的なストラテジーがある。

4 研究の視点と方法

(1) 研究の仮説

以上のような先行研究の検討をもとにして、H 小学校第 5 学年 24 名を対象に、社会科産業学習の単元において、実践研究を行った。研究の仮説は次の通りである。

仮説 1 Graphic Organizer (関連を示す図表) を使った手がかりを与えることによって、どの子も先行知識との関連で読んだり、予測しながら読んだり、必要な情報を取り出しながら読んだり、分析的に読んだりする力を付けることができる。

仮説 2 社会科において、語彙の学習は、多元的な文脈、子どもにとって意味ある多元的な出会いの中で行われる。

仮説 3 書く力は、読む力と連動している。読む文章の構造的特徴を教えることが、書く力の向上につながる。

(2) 実践で指導した図表

読解の指導については、次のような図表を使った。

教科書の構成を読み取る指導として、「PLAN 表」(図 4 参照) を用いた。「PLAN 表」は、教科書がどのような構成で書き表されているのかを読み取り、知らないトピックと知っているトピックとを位置づけるためのものである。本実践では、児童がイメージしやすいように「教科書先読み表」という名称にして使用した。

教科書の内容を読み取る指導では、「KWL 表」(図 3 参照) と「Q&A 表」を使った。

「KWL 表」は知っていること／学びたいこと／学んだこと・さらに学びたいことに分けながら読み進める方法である。児童自身が先行知識を活性化させ、既習事項や体験を引き出しながら読むことができる。先行知識と出会わせるため、学習の見通し

を持たせるための 2 つの側面から、この方法を使うことにした。本実践では、「予習シート」という名称にして使用した。

語彙の指導では、「社会科用語キーワードまとめ表」(図 5 参照) と「Y チャート表」(図 6 参照) を用いた。

「社会科用語キーワードまとめ表」は、オグレの実践では、難しい概念を要約させるための図表として使われていたものである。これを、既習の用語や事象を使って、さらに上位の概念を説明するための道具として使用させた。社会科用語キーワードまとめ表では、キーワード(例えば、加工貿易、水産資源、品種改良など)を今まで学習したことや自分の体験から獲得した言葉を使って説明できるようにした。

「Y チャート表」は、2 つの物や概念の類似性と相違性を分析するための表である。ここでは、2 つ以上の難しい概念同士を比べることに使った。比較には、類似点と相違点という二つの視点がある。子どもたちはそのような視点を持って、教科書の情報を取り出し、比較することができると考えた。本実践では、「ちがいと違い見つけ表」と名付けたが、「Y チャート」という呼び名のほうが児童に浸透し、定着した。

作文の指導では「作文枠組み表」と「意見文の構成シート」を使って、書きたいジャンルの文の構成がわかるようにした。特に、場面の設定や背景の構築に力を入れ、書く前に自分の考えをしっかりと持たせるようにした。そうすることで、何を書いているのかかわからないという状態をなくするようにしたいと考えた。

(3) 日常的な場面での指導

読む力や書く力は授業以外の場面でも日常的に育てていくことが大切である。そこで、朝の会では、教師が前の日に学習したことふりかえりを黒板に不完全な文章で書いておき、次の日の朝、日直の児童と一緒に教師の文章を修正させ、学級のみんなで一斉に音読させるという方法をとった。帰りの会では、一日の学びをふりかえり、ふりかえりの文章を書く時間を設けた。

5 アセスメントの枠組み

(1) 読解の力の評価

- ① 社会科の知識・社会認識に関するテスト
- ② 教科書を使った読解テスト
- ③ 「予習シート」を使ったテスト

(2) 語彙に関する調査

- ① 社会科の語彙のテスト
- ② 「社会科用語(キーワード)まとめ表」を使ったテスト
- ③ アンケート調査
- ④ 面談

（３）作文の力の評価

子どもたちの書いたレポート文を評価した。その際に、自分の立場を明確にもち、主張を支える根拠を示して書くことができるかを確認した。

第2部 実践の経過

1 4～5月の実践 「1 日本の国土と人々の暮らし」

本研究の実践は9月からであるが、6からの産業学習の単元に入るまでの実態は次の通りである。

（１）読解の力の実態

4月初めから、社会科のリテラシーについて、地図や写真など視覚的な資料の読み取りができること、グラフや表などの統計的な資料の読み取りができること、基本的な用語を理解し正しく使うことを考えながら実践をすすめることにした。

当初は、文章を読み取ることが難しい児童も何人かいた。多くの児童が教科書の文章と写真資料を関連付けることが難しく、文章の読み取りも写真資料の読み取りも困難であるという実態がわかった。

（２）語彙の力の実態

国土の様子を書き表す際に、方位、地形、気候などの既習の用語が数種類しか見られなかった。

4～5月は、語彙を増やすために辞書を持たせ、辞書引きを行うようにした。しかし、辞書で言葉を調べるだけでは言葉の理解は不十分であった。例えば、輪中集落について学習した際に、「輪中」という言葉について辞書を引いて調べ、ノートに書き出した。その後、市販の単元テストを行ったが、正しく答えられたのは23人中8人であった。

（３）作文の力の実態

単元のはじめに教科書では「日本ってどんな国？」と問われている。児童の記述は「日本は海に囲まれている。」「太平洋に面している。」など単文のみであった。記述された文字数も少なく、短い文でしか書けないという実態が明らかになった。その理由は、何を書いたらいいかわからない、どう書いたらいいかわからないということだった。

2 実践の経過

本研究の実践は9月から開始し、12月までの約4か月間の学習の様子を分析し、指導方法の検討を行った。6月からの産業学習の単元計画は次のとおりである。

1. 6～9月上旬の実践・・・「1 米作りのさかんな地域」
2. 9～10月の実践・・・「2 水産業のさかんな地域」
3. 10～11月の実践・・・「3 これからの食料生産」
4. 11～12月の実践・・・「1 自動車工業のさかんな地域」

5. 12月の実践・・・「2 日本の工業の特色」

また、実践を始める前の9月に事前アンケートを実践が終わった後の12月に事後アンケートを実施した。

3 実践の概要

ここでは、リテラシーの指導（読解、語彙、作文）についての指導過程をまとめる。

（１）読解の指導

図表を使いながらの読解の指導は実践当初、書き方に戸惑う児童の姿が見られた。ていねいに書き方のモデルを示しながら取り組んでいった。実践を重ねると、予習に慣れてきた様子が見え始めた。10月の初めから「KWL表」を家庭学習でするようにしてみたところ、ほとんどの児童ができていた。提出された表を見ると、疑問や質問が書かれており、読みを深めたことが伝わってきた。その後、「KWL表」「Yチャート」「Q&A表」を増刷して、児童が自由に好きなだけ使ってよいように学級に設置した。これらは日々の予習や単元のテスト対策として持ち帰り、家庭学習で使用されていた。また、12月に入ってそれらを「社会科ファイル」にまとめたことによって、前もって予習を進めたい児童やより深く調べたい児童が、どんどん自分のペースで進められるようになった。

一方、なかなか進まない児童もいたが、朝学習などで時間を確保して取り組むようにした。Graphic Organizerは「どの子にも…力をつける」ための手がかりである。社会科が苦手な児童や読解が苦手な児童にも、必ず読む機会を与え、読むための時間を確保することが大切であると考えて取り組んだ。

（２）語彙の指導

語彙の学習では、「書き方が難しい」と言いながらも、新しい図表に興味を示し、工夫して書いている様子が伝わってきた。どの子も自分の言葉で書いているからである。「社会科用語（キーワード）まとめ表」では、例に反するものを書くことが難しいが、「もし、機械化しなかったら…」「品種改良する前は…」などと、想像したり調べたりしながら書き込むことができた。また、身の回りのことに例えて書くようになったので、難しい言葉の意味でも自分の生活と関連付ける力がついていった。

「Yチャート表」は、名前が気に入ったようで、子どもたちから親しみをもって呼ばれるようになった。「自動車工場と関連工場」、「働く女性の問題と外国人労働者の問題」など、あまり関連がなさそうなテーマでも、よく調べて、共通性と相違性を見つける力をつけた。

また、DVDやインタビューなど、調べる方法の幅を広げる学習活動を増やしていった。そのためには、地域のおじさんに話す、5分間作文に書くなど、目的を明確にして、何を調べるのか、何のために調べるのかという意図をもてるようにした。

(3) 作文の指導

作文では、なんとなく書くことに抵抗感があった児童が、モデル文を示すと「そういうことか」とつぶやいて書き始めた。書けた文をその学習の観点に沿っているかでA、AA、などとわかりやすく評価したり、「何文字書けるか?」「何行書けるか?」という量的な観点で評価したりすることで、伸びを感じて意欲的に取り組んでいた。

実践を重ねると、次第に「自分の立場をはっきりさせる」「根拠を明らかにする」「主張を述べる」などをきっちりと書くことができるようになった。児童からも「わたしはみんなの意見に反対で…」や「3本の矢が必要だ」「あ～根拠になる事実が足らん」といった声が聞かれ、その内容にこだわっていることが伝わってきた。書くことの楽しさを、書く「量」から「質」へと転換させたといえるであろう。

また、見学作文を書くときには、「レポーターになろう」と題して「作文枠組み表」を使って、自分の立場を設定して書くことにした。自分の主張を持って、「鉄の生産量は増えているんじゃないか?」「製鉄所の収入は減っているんじゃないか?」という仮説をたてるようになった。

その後、意見文に取り組むと、主張を支える「3本の矢」を意識して、自分の主張とその根拠となる3つ以上の事実を挙げた文が書けるようになった。さらに、自分の考えを書くことから始まり、人の考えを読んでさらに自分の考えをもつことへと発展していった。

第3部 結果とその考察

1 仮説の検証

(1) 仮説1の検証

仮説1は「Graphic Organizer（関連を示す図表）を使った手がかりを与えることによって、どの子も先行知識との関連で読んだり、予測しながら読んだり、必要な情報を取り出しながら読んだり、分析的に読んだりする力を付けることができる。」というものであった。ここでは、まず、Graphic Organizer（以下「図表」と表す）を使った手がかりを与えたことが読解の指導に有効であったかどうかを検討する。

① 事後アンケートの結果より

まず、アンケート結果をもとにして図表の有効性について検討してみたい。図1は「社会科ファイルでどんな力がついたと思うか」という問いに対しての結果である。

最も多かったのが「教科書を自分で読む力」であった。次いで「グラフや表を読む力」「共通点と違いを比較する力」が多かった。読解指導において、図表が教科書を読むための具体的な

手立てとなっている。

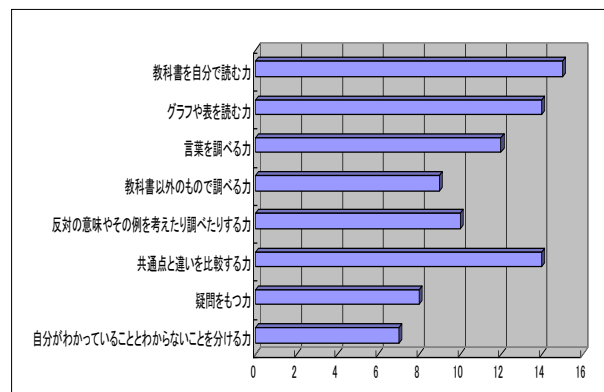


図2は「社会科ファイルの中で役に立ったものは何か」という問いに対する回答である。この結果では、「予習シート」が有効であったと答えた児童が最も多く、次いで「キーワードまとめ」「Yチャート」も多くの児童に支持されていた。使用頻度が低い「教科書先読み表」を除くと、どの図表も24人中半数以上の児童が役に立ったと感じている。

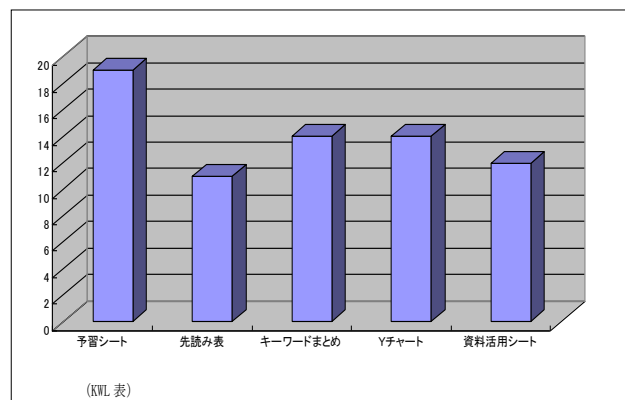


図2「社会科ファイルの中で役に立ったものは何かについて」の児童の回答

次に、各図表について個別に検討してみたい。

② 予習シート（KWL表）について

図1では、教科書を自分で読む力がついたと答えた子どもがもっとも多い。さらに、図2では、子どもたちは「予習シート」（KWL表）がもっとも役に立ったと答えている。この結果から、「予習シート」（KWL表）（図3）がもっとも子どもたちに支持され、読む力をつけることができたといえる。「予習シート」（KWL表）の活用によって、子どもたちは、教科書の文章を読むときに、「K」「W」「L」の観点をもって読むことができ、先行知識と関連付けて読む力や予測しながら読む力がついてきた。

予習シート

KWL 表

K? 知っていること	W? 疑問	L? 学んだこと
バスケットボールから多く輸入している	野菜の中で一番輸入が多いものは？ バスケットボールは、所産(けと)なく、寒い所でも作られている。 アメリカは、野菜なども作るのに、気候が適しているからたくさん車輸出しているの？ それとも、こっちがたくさん車輸入しているの？	小麦は、アメリカからたくさん車輸入している。 大豆は、いろいろな国から、少し車輸入している。 中国から少ししか車輸入していない。
外国産はねもたが安いかな？		

図 3:「予習シート(KWL表)」児童の作品

③ 社会科用語キーワードまとめ・Yチャートについて

「社会科用語キーワードまとめ」・「Yチャート」は、語彙を多角的にとらえさせるための手立てとして作ったが、読解にも効果があったようである。

「社会科用語キーワードまとめ」では用語を調べ、例や反対のものを挙げるときの資料として、教科書やそれ以外の本を読むことで、「必要な情報を取り出しながらか読む」という力につながった。

「Yチャート」では、二つのよく似た概念を比較することでその共通性と相違性に着目し、共通点と違いを比較しながら読むことができた。そうした読みの経験が、「先行知識との関連で読む」力や「分析的に読む」力につながっていった。

④ 教科書先読み表 (PLAN 表) について

次に「教科書先読み表」(PLAN 表)について考えたい。この図表は単元の導入とふり返りにしか活用しなかったが、児童からは、「教科書を先読みする力がつきました」という意見も出た。

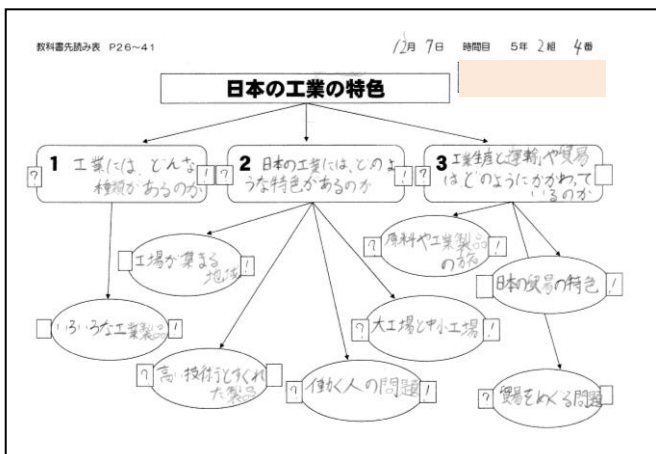


図 4:教科書先読み表(PLAN 表)児童の作品

また、単元の導入で「知らんことばかりじゃ」と言いながら書き込み、単元のまとめの段階で「もうこんなに勉強したんじゃない」「これ覚えとる。これは勉強したのにわすれたなあ」など

と、自らの学びを振り返ることができた。多くの児童が未習の内容と既習事項とを意識できたようである。図 4 では児童が疑問をもったところ「？」と分かったところ「！」が記入されている。自分自身で学びの様子を確かめていることがわかる資料である。

⑤ 仮説 (1) について、考察の要約

以上のような結果にもとづいて、仮説 1 については、図表を使用したことによって、次のような力を育てることにつながったのではないと思われる。

- i 「予習シート」を使って予習読みをすることが、先行知識と関連付けながら読んだり、疑問を持ちながら読んだりする力につながった。
- ii 「キーワードまとめ」表を使って語彙を多角的にとらえることが、教科書を読み返したり、資料として図書を活用したりすることにつながり、必要な情報を取り出して読む力を育てることができた。
- iii 「Yチャート」を使って社会的な事柄の共通性と相違性をとらえることが、複数の事象の共通点や相違点を見つけるために比較しながら読むことにつながり、分析的な読みの力を育てることができた。
- iv 「教科書先読み表」を使って単元全体の構成をつかみ、学習後に振り返ることが、学習内容を見通しを持って読むことと自らの学びを確かめることにつながり、予測して読む力を育てることができた。

(2) 仮説 2 についての結果と考察

仮説 2 は「社会科において、語彙の学習は、多角的な文脈、子どもにとって意味ある多角的な出会いの中で行われる。」というものであった。ここでは、語彙の学習において、多角的な文脈や子どもにとって意味のある多角的な出会いをさせることができたかどうかを検討する。

① 図表の効果について

図 5 の「社会科用語 (キーワード) まとめ表」では、「加工貿易」という言葉を、「辞書で調べた意味」、「その例」、「その例の反対」、「その特徴」、という流れで書き込み、最後に、「あなたが考えた意味」で簡単な文章にまとめている。

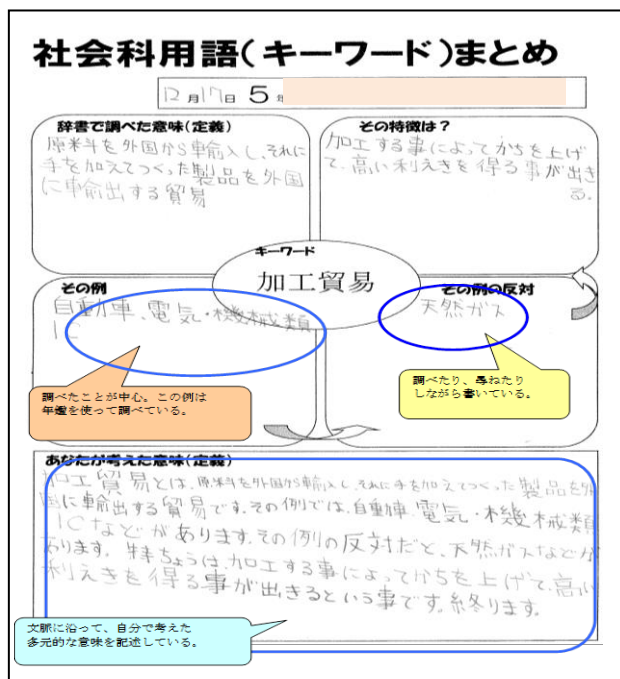


図5:「キーワードまとめ」児童の作品

このように、言葉の具体例を挙げたり、反対の例を挙げたりすることができるようになった。また、それらを調べるためには、国語辞典だけではなく、百科事典や資料集、年鑑や図鑑などを使っている。

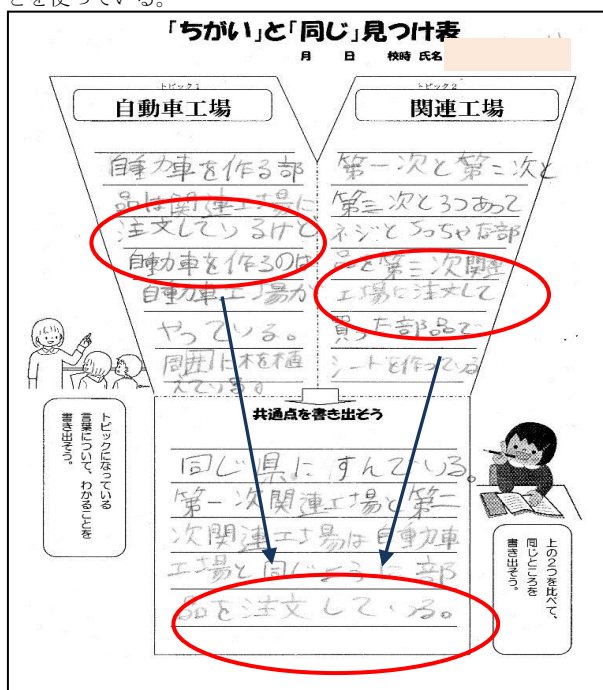


図6:「Yチャート表」児童の作品

図6の「Yチャート」では、「自動車工場」と「関連工場」を比較している。2つの事柄を比較するとき、この図表を使うことで、相違性と類似性に注目することができた。相違性と類似性の両方を見つけ出そうとすると、教科書だけの情報では足ら

ず、資料集や百科事典、図鑑などに広がった。

さらに、作文のメモを書く学習活動の中にも、語彙の広がりが見て取れるところがあった。図7に「意見文の構成シート」に見られた児童の記述を紹介する。

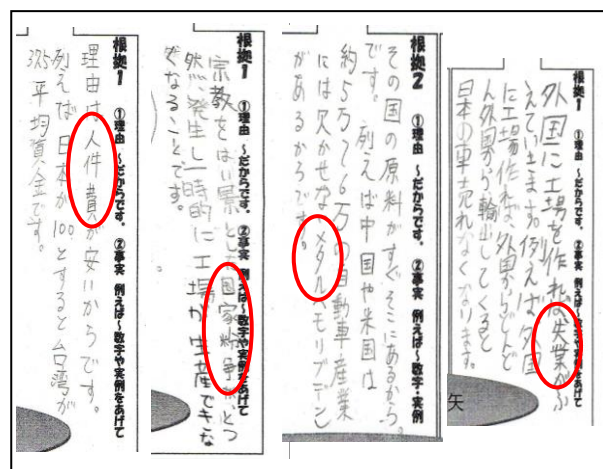


図7:「意見文の構成シート」児童の作品

「失業」「メタル」「国家紛争」「人件費」など、教科書を学習していただいただけでは見られない言葉が記述されている。これらは、学校図書館や市立図書館の図書(百科事典、年鑑、雑誌)を資料として活用している。また、家庭や地域の大人に尋ねるという方法で調べてきた児童もいた。その際に、地域の商店や町工場を訪問したり、市役所や遠くの祖父母に電話したりするという方法をとっている姿が見られた。

このように言葉との多角的な出会いができていた。

② 言葉との出会いが広がったかについて

以上のような実践の結果を通して、児童にとっての言葉との出会いの場が増えたかどうかを、事前事後アンケートで検討してみた。

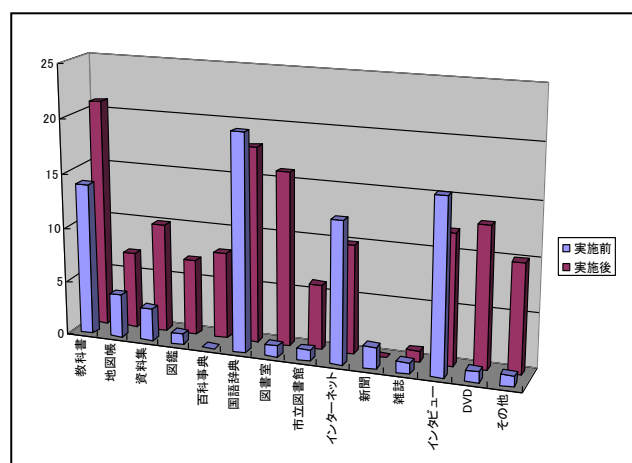


図8:「わからない言葉があったときに何で調べるか」についての回答

図8は、「わからない言葉があったときに何で調べるか」とい

う設問についての結果である。実践前は「国語辞典」「インタビュー」「教科書」「インターネット」の4つが主流であった。一方、実践後では「図書室の本」「DVD」「百科事典」「図鑑」「資料集」などが増えた。「その他」の中身は、年鑑や電子辞書などが見られるようになった。

次に、個々の児童の中では変化があったのかを検討したい。図9は、「わからない言葉があったときに何で調べるか」の回答数を1人あたりにして集計したものである。

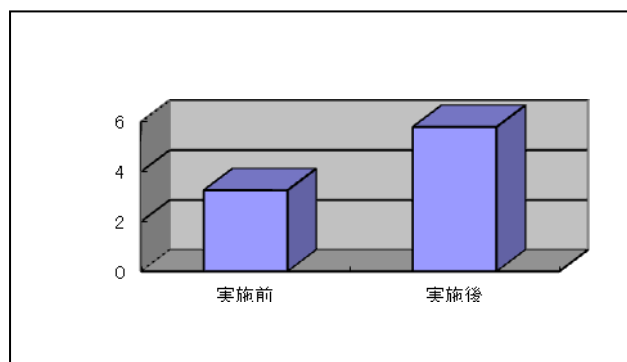


図9: わからない言葉があったときに調べる方法(1人あたりの数)

これによると、1人当たりの回答数は実践前には3.25個であったが、実践後は1人当たり5.79個と2.5ポイント程度増えていた。この結果から、実施前に比べて、児童1人1人が新しい言葉と出会う方法を増やしているということが明らかになった。

③ 仮説2 について考察の要約

以上のような結果をふまえて、仮説2「社会科において、語彙の学習は、多元的な文脈、子どもにとって意味ある多元的な出会いの中で行われる。」についての結果は次のとおりである。

- i 「キーワードまとめ」や「Yチャート」などの図表を活用することで、教科書を読み返すだけでなく、教科書を越えた多様な語彙を使うようになった。
- ii 根拠を示すための幅広いデータや事実を、資料としての図書を活用して情報を取り出すことができた。それらを「5分間作文」に幅広い語彙として書き表すようになった。
- iii 電話やインタビューで学校の範囲を超えた実社会の大人の話を聞くことで、教科書やインターネットだけではわからない、言葉との出会いが広がった。
- iv 指導者自身が幅広く「社会」に関心を持ち、「社会」と児童とを出会わせる学習を進めていくことが、「社会」の幅広い語彙との出会いとその獲得をすすめることにつながった。

(3) 仮説3についての結果と考察

仮説3は「書く力は、読む力と連動している。読む文章の構造的特徴を教えることが、書く力の向上につながる。」というものであった。そこで、書く力を向上させるために行った作文の

指導について検討する。

① アンケートをもとにした考察

アンケート「⑥5分間作文で書く力がついたと思うか」という問いには、「思う」23人「思わない」1人であった。ほとんどの児童が書く力がついたと実感していた。では、どんな力がついたと感じているのかを集計した。

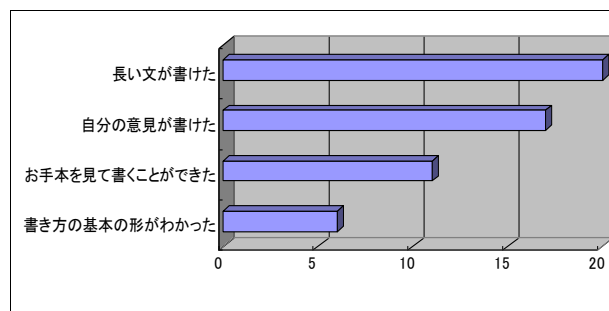


図10: 「5分間作文でどんな力がついたと思うか」に対する児童の回答

図10から、「自分の意見」を「長い文」で書けるようになったと実感している児童が多いことが分かる。実践の経過で、4月～5月には1文か2文で書く児童が多く、「何を書くのかかわらん」という声が聞かれていたが、その子どもたちが「長い文が書けた」「自分の意見が書けた」と感じているのは書く量・内容ともに充実してきたことを表している。

作文が苦手と感じているある児童は、「5分間作文で練習できたのがよかった。もし練習しなかったら、短い文しか書けなかったかもしれない。日記も長い文で書いている。12月になってから、家で日記をつけ始めた。」と語った。練習の成果があったこと、実生活の中にも生きた力として表れていることを実感するエピソードであった。

② 文の構造的特徴を教える指導の効果について

次の図11では、「外国に工場をつくることに賛成か反対か」というテーマで、意見文を書いたときの児童の作品を紹介する。

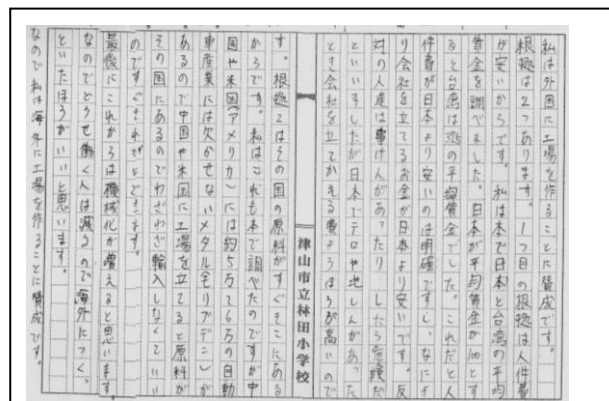


図10: 「外国に工場をつくることに賛成か反対か」をテーマに書いた児童の作品

このテーマのときには、多くの児童が「反対」という主張を

この作品は、自分の意見を述べて、それを支える複数の根拠（「人件費の問題」、「原料の問題」、「機械化の問題」）を列挙するという意見文の構造にもとづいて書かれている。求められる文章の構造的特徴をよく理解して書いているということがわかる作品である。

一方、書くことが苦手な児童についての手立ても大切である。本実践では教師が次のようなモデル文を示して、児童に読ませてから、文章を書かせる指導を行った。(図 12)

図 12: 作文指導に用いたモデル文の例

仮説3についての結果は次のとおりである。

- 8

